

## 口永良部島の火山活動解説資料

福岡管区气象台  
地域火山監視・警報センター  
鹿児島地方气象台

＜噴火警戒レベルを3（入山規制）から2（火口周辺規制）に引下げ＞

口永良部島では、2025年4月から山体の浅いところで地震活動が活発化し、火山性地震が多い状態でしたが、7月頃から減少した状態で経過しています。また、その他の観測データにも活動の高まりを示す特段の変化は認められません。

これらのことから、本日（5日）11時00分に火口周辺警報を発表し、噴火警戒レベルを3（入山規制）から2（火口周辺規制）に引き下げました。

なお、火山性地震は7月頃から減少した状態ですが、中長期的には地震活動は活発な状態です。火山活動は引き続き高まった状態で経過しており、火口周辺に影響を及ぼす程度の噴火が発生する可能性があります。

### 【防災上の警戒事項等】

新岳火口及び古岳火口から概ね1kmの範囲では、噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石及び火砕流に警戒してください。また、西側は新岳火口から概ね2kmの範囲では、火砕流に警戒してください。

風下側では、火山灰だけでなく小さな噴石が遠方まで風に流されて降るおそれがあるため注意してください。

地元自治体等の指示に従って危険な地域には立ち入らないでください。

### ○ 活動概況

口永良部島では、2025年4月から山体の浅いところで地震活動が活発化し、火山性地震が多い状態でしたが、7月頃から減少した状態で経過しています。振幅の大きな火山性地震は発生していません。地震は次第に減少していますが、中長期的には地震活動は活発な状態です。火山性地震は主に古岳火口付近で発生しており、新岳火口付近においても地震活動が継続しています。

新岳では、8月以降は白色の噴煙が最高で火口縁上400mまで上がりました。古岳では、監視カメラで火口縁を越える噴煙は観測されませんでした。

8月19日から21日にかけて山麓から実施した現地調査では、新岳火口西側割れ目付近及び古岳火口周辺において地熱域を引き続き確認しました。新岳火口からは火口縁上100m程度、古岳火口からは火口縁をわずかに超える程度の噴煙を確認しました。新岳と古岳の周辺の状況及び噴煙活動に特段の変化は認められません。

この火山活動解説資料は気象庁ホームページでも閲覧することができます。

[https://www.data.jma.go.jp/vois/data/report/monthly\\_v-act\\_doc/monthly\\_vact.php](https://www.data.jma.go.jp/vois/data/report/monthly_v-act_doc/monthly_vact.php)

資料で用いる用語の解説については、「気象庁が噴火警報等で用いる用語集」を御覧ください。

<https://www.jma.go.jp/jma/kishou/known/kazan/kazanyougo/mokuji.html>

この資料は気象庁のほか、国土地理院、京都大学、東京大学、国立研究開発法人防災科学技術研究所、国立研究開発法人産業技術総合研究所及び屋久島町のデータも利用して作成しています。

資料中の地図の作成に当たっては、国土地理院発行の『数値地図50mメッシュ（標高）』及び『電子地形図（タイル）』を使用しています。

噴火警戒レベルの判定基準表については気象庁ホームページを御覧ください。

[https://www.data.jma.go.jp/vois/data/filing/level\\_kijunn/keikailevelkijunn.html](https://www.data.jma.go.jp/vois/data/filing/level_kijunn/keikailevelkijunn.html)

8月26日に鹿児島県の協力により上空からの観測を実施しました。2024年10月の観測と比較して、新岳及び古岳の火口内やその周辺において、地熱域や噴煙の状況に特段の変化は認められませんでした。

火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は、2024年8月以降、概ね少ない状態で経過しています。東京大学大学院理学系研究科、京都大学防災研究所、屋久島町及び気象庁が実施した観測では、8月以降は1日あたり20～70トンと少ない状態でした（8月30日の観測では1日あたり20トン）。

GNSS連続観測では、2023年6月下旬頃から10月頃にかけて古岳付近の膨張を示す変動が観測されていますが、その後更なる膨張を示す変化は認められません。

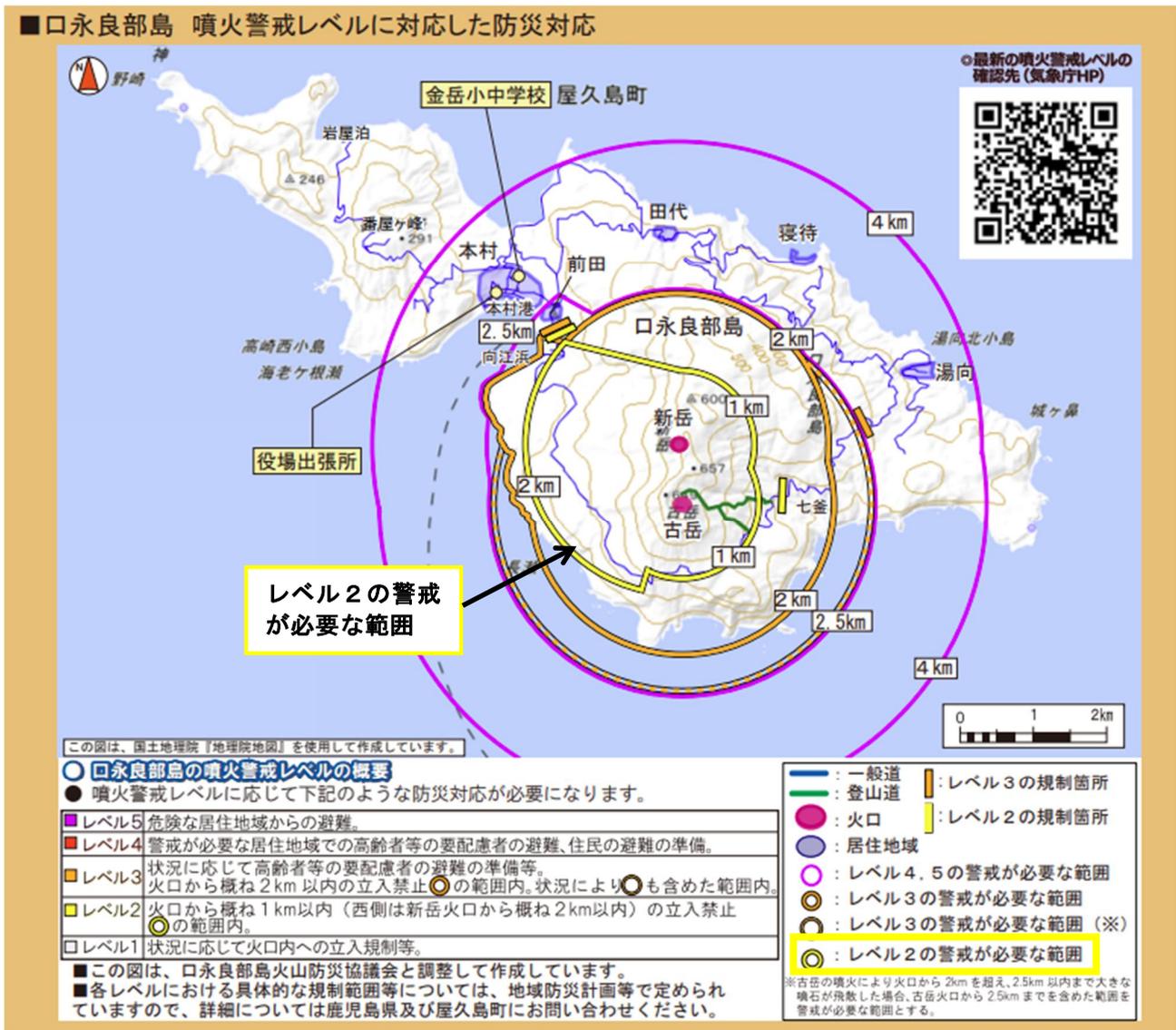


図1 口永良部島 警戒が必要な範囲

新岳火口及び古岳火口から概ね1kmの範囲では、噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石及び火砕流に警戒してください。また、西側は新岳火口から概ね2kmの範囲では、火砕流に警戒してください。

風下側では、火山灰だけでなく小さな噴石が遠方まで風に流されて降るおそれがあるため注意してください。

地元自治体等の指示に従って危険な地域には立ち入らないでください。

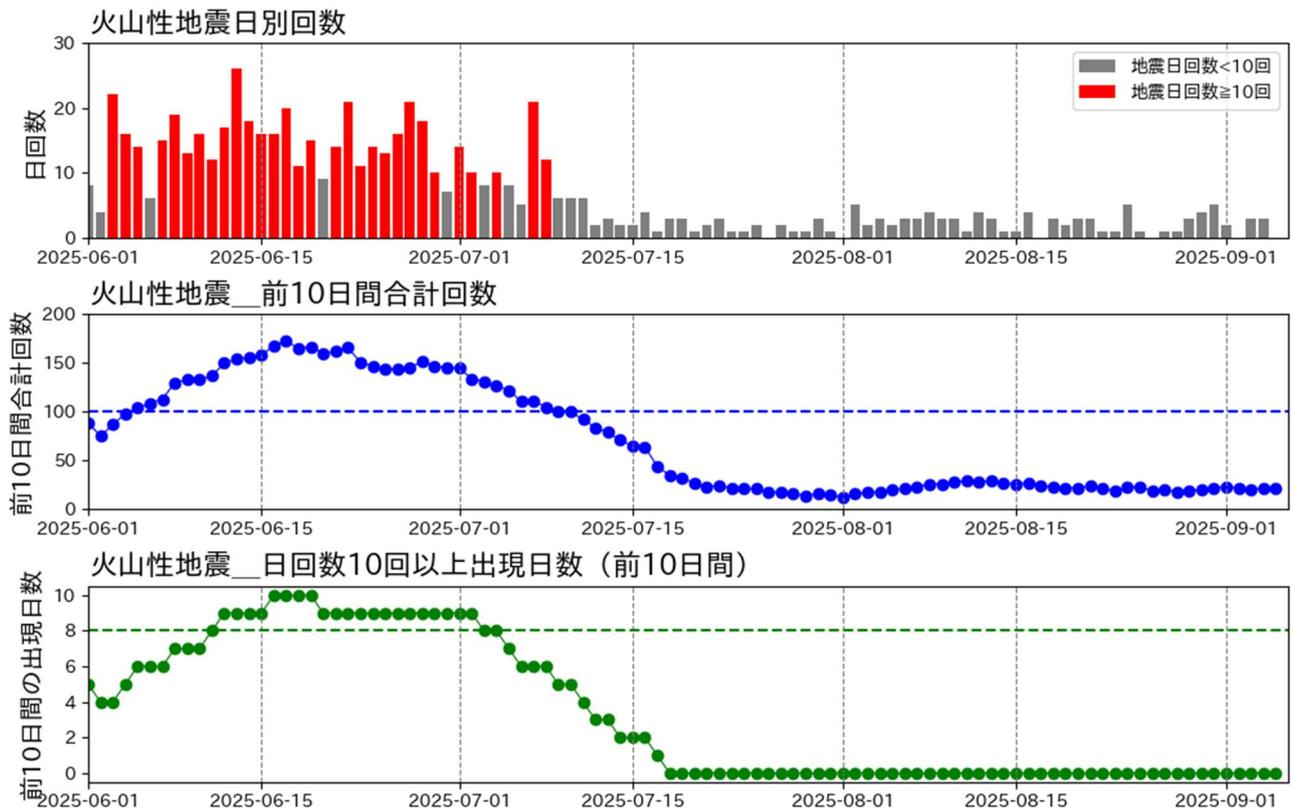


図2 口永良部島 【1段】火山性地震の日別回数、【2段】火山性地震の前10日間合計回数、【3段】火山性地震の日回数10回以上の出現日数(前10日間) (2025年6月1日～9月5日08時まで速報値)

- ・2025年4月から山体の浅いところで地震活動が活発化し、火山性地震が多い状態でしたが、7月頃から減少した状態で経過しています。
- ・地震回数は減少していますが、中長期的には地震活動は活発な状態です。

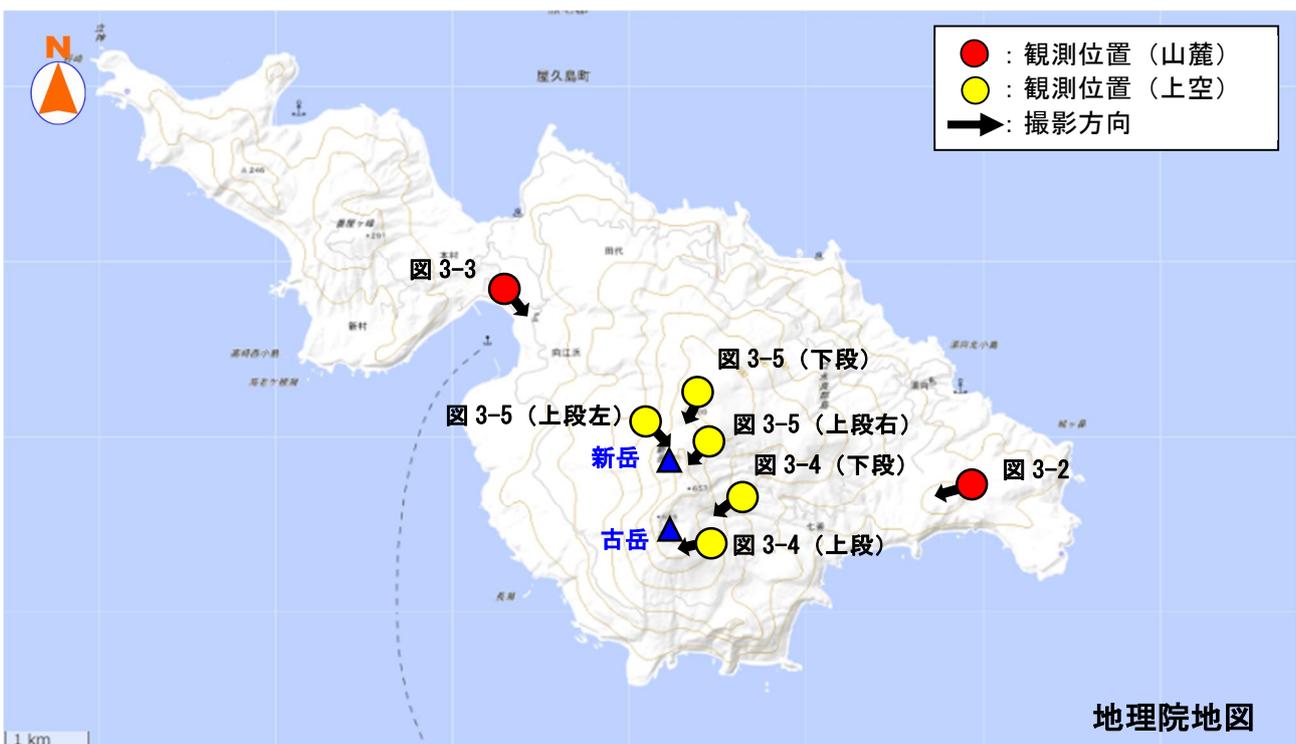


図3-1 口永良部島 観測位置及び撮影方向

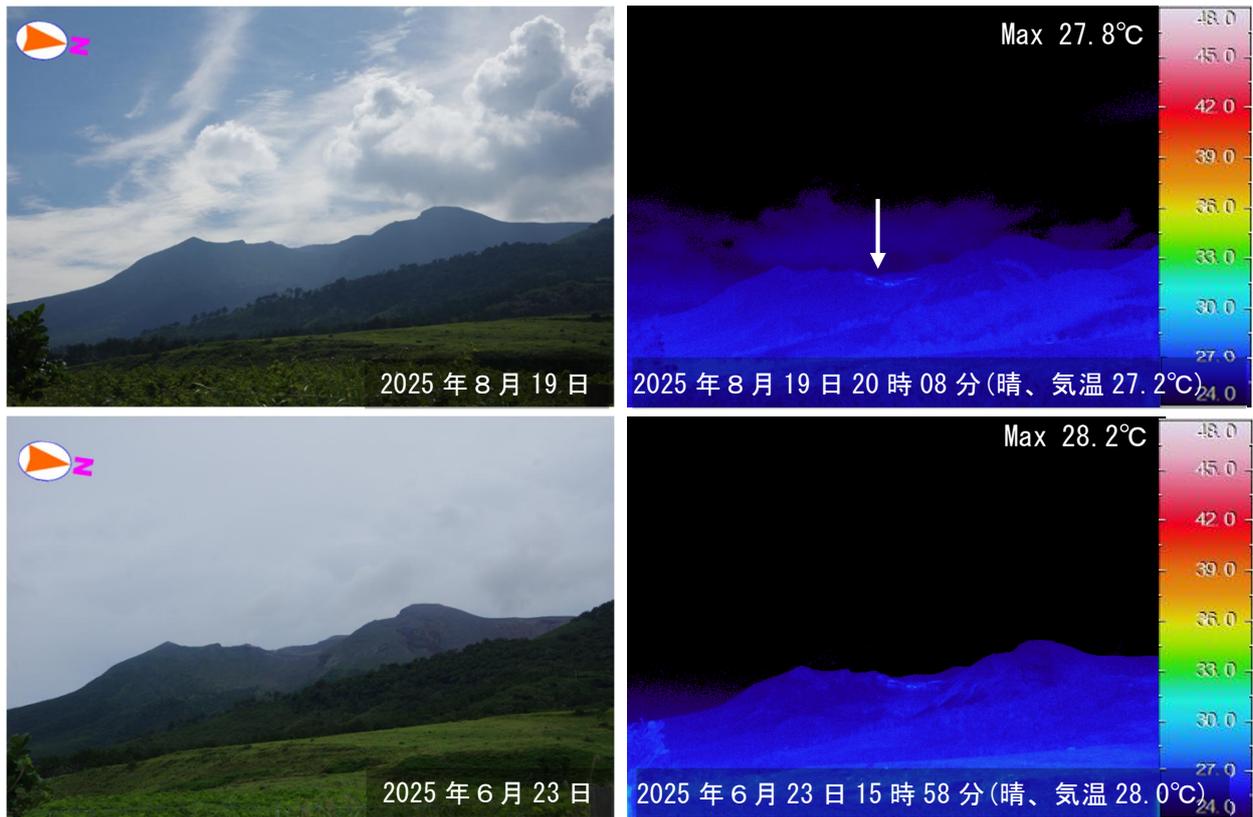


図 3-2 口永良部島 古岳周辺の地熱域の状況（湯向から観測）

8月19日から21日にかけて山麓から実施した現地調査では、古岳火口において火口縁をわずかに超える程度の噴煙を確認しました。また、古岳火口周辺において地熱域（白矢印）を引き続き確認しました。

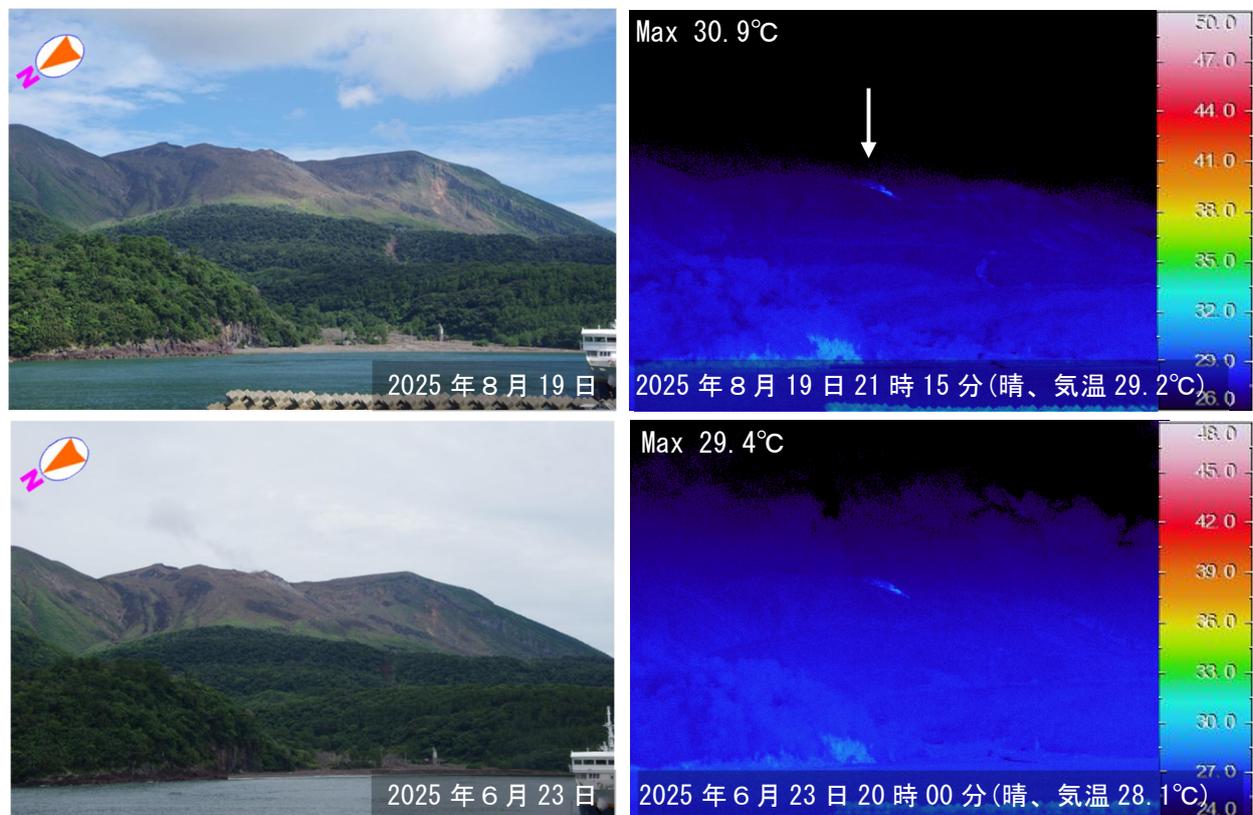


図 3-3 口永良部島 新岳火口及び新岳火口西側割れ目付近の状況（本村から観測）

8月19日から21日にかけて山麓から実施した現地調査では、新岳火口において火口縁上100m程度の噴煙を確認しました。また、新岳火口西側割れ目付近において地熱域（白矢印）を引き続き確認しました。

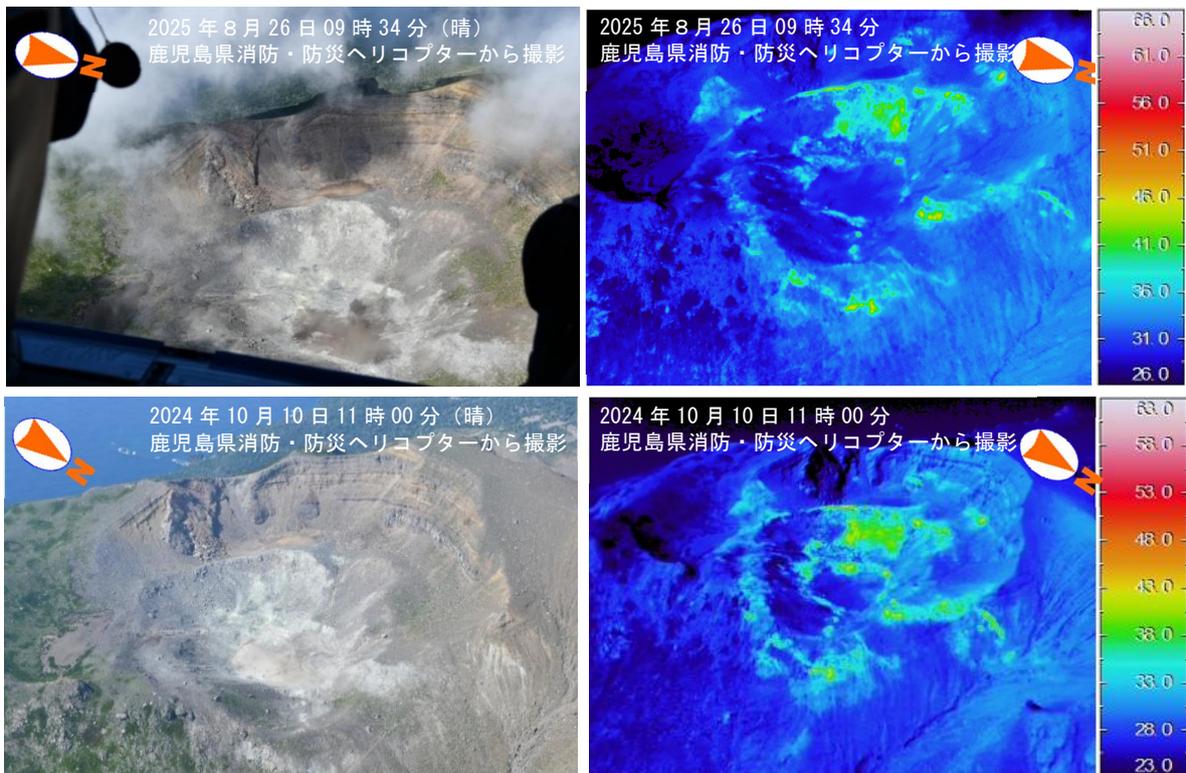


図 3-4 口永良部島 古岳火口及び周辺の状況（上空から観測）

- ・ 8月26日に鹿児島県の協力により上空から実施した観測では、2024年10月の観測と比較して、古岳火口とその周辺の状況に特段の変化は認められませんでした。
- ・ 古岳火口内において白色の噴煙を確認しました。また、古岳火口内及びその周辺において地熱域を引き続き確認しました。

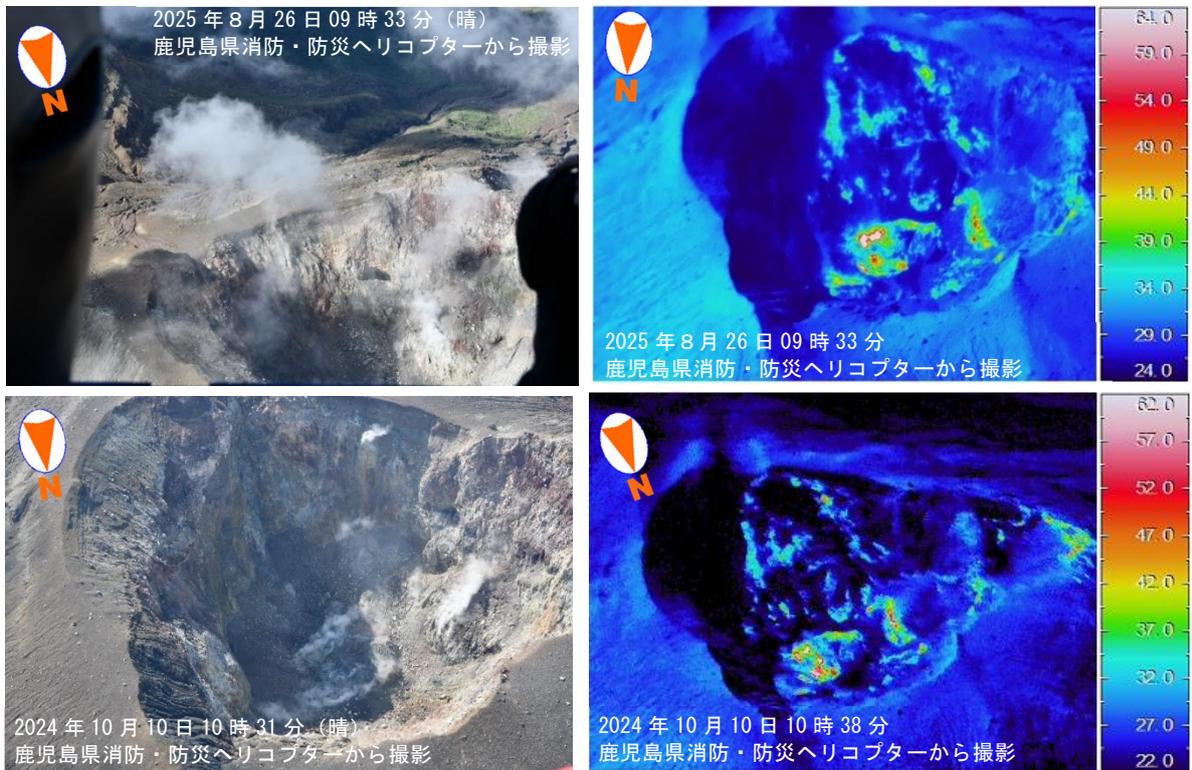


図 3-5 口永良部島 新岳火口内の状況（上空から観測）

- ・ 8月26日に鹿児島県の協力により上空から実施した観測では、2024年10月の観測と比較して、新岳火口とその周辺の状況に特段の変化は認められませんでした。
- ・ 新岳火口において火口縁を超える程度の白色の噴煙を確認しました。また、新岳火口内、西側割れ目付近及びその他周辺部において地熱域を引き続き確認しました。

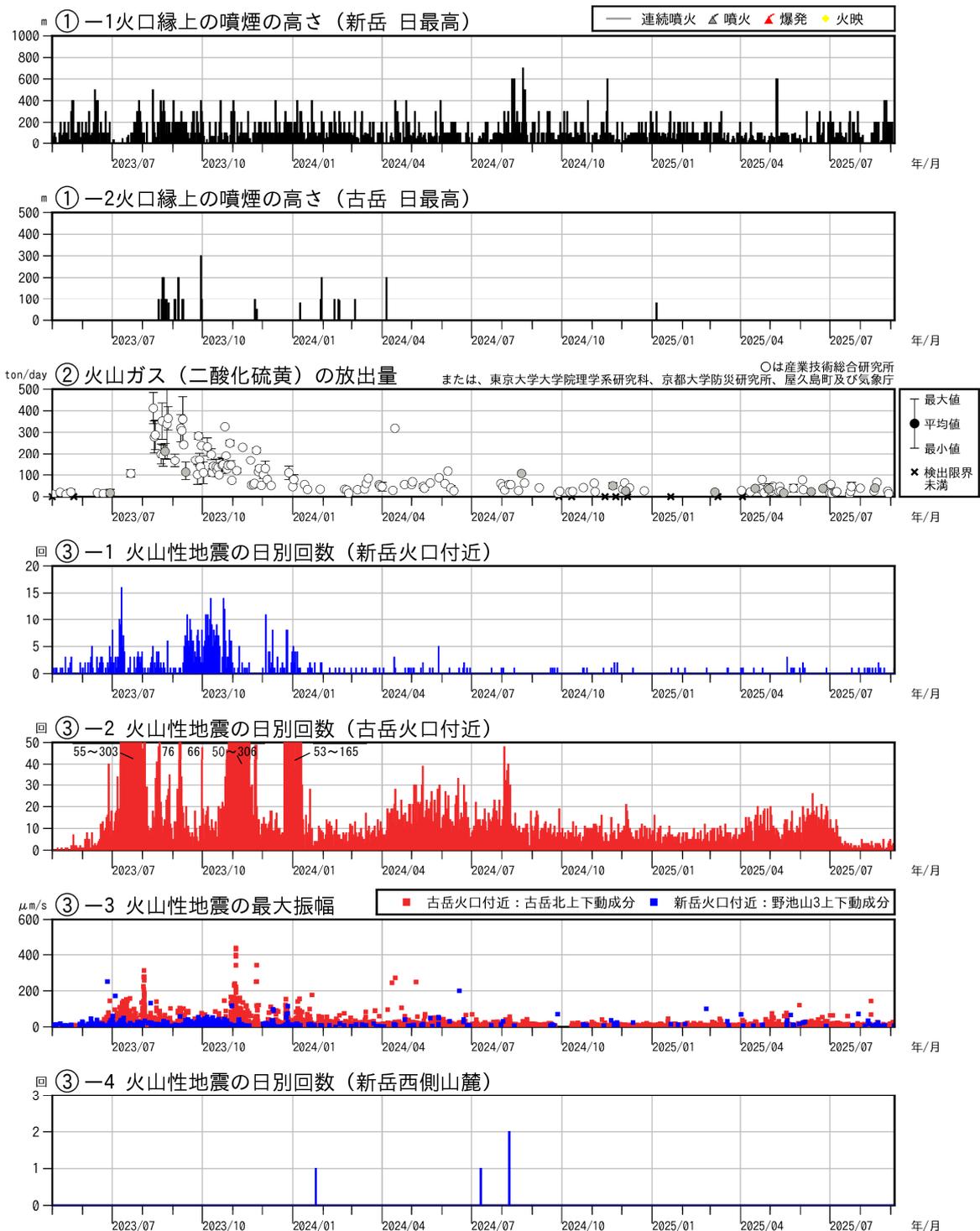


図4 口永良部島 最近の火山活動経過図（2023年5月～2025年9月4日）

<2025年8月以降の概況>

- ・噴煙の状況に特段の変化はなく、新岳では白色の噴煙が最高で火口縁上400mまで上がりました。古岳では、監視カメラで火口縁を越える噴煙は観測されませんでした。
- ・東京大学大学院理学系研究科、京都大学防災研究所、屋久島町及び気象庁が実施した観測では、火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は、8月以降は1日あたり20～70トンと少ない状態でした（8月30日の観測では1日あたり20トン）。
- ・2025年4月から山体の浅いところで地震活動が活発化し、火山性地震が多い状態でしたが、7月頃から減少した状態で経過しています。
- ・古岳火口付近、新岳火口付近、共に振幅の大きな火山性地震は発生していません。
- ・新岳西側山麓付近の火山性地震は発生していません。

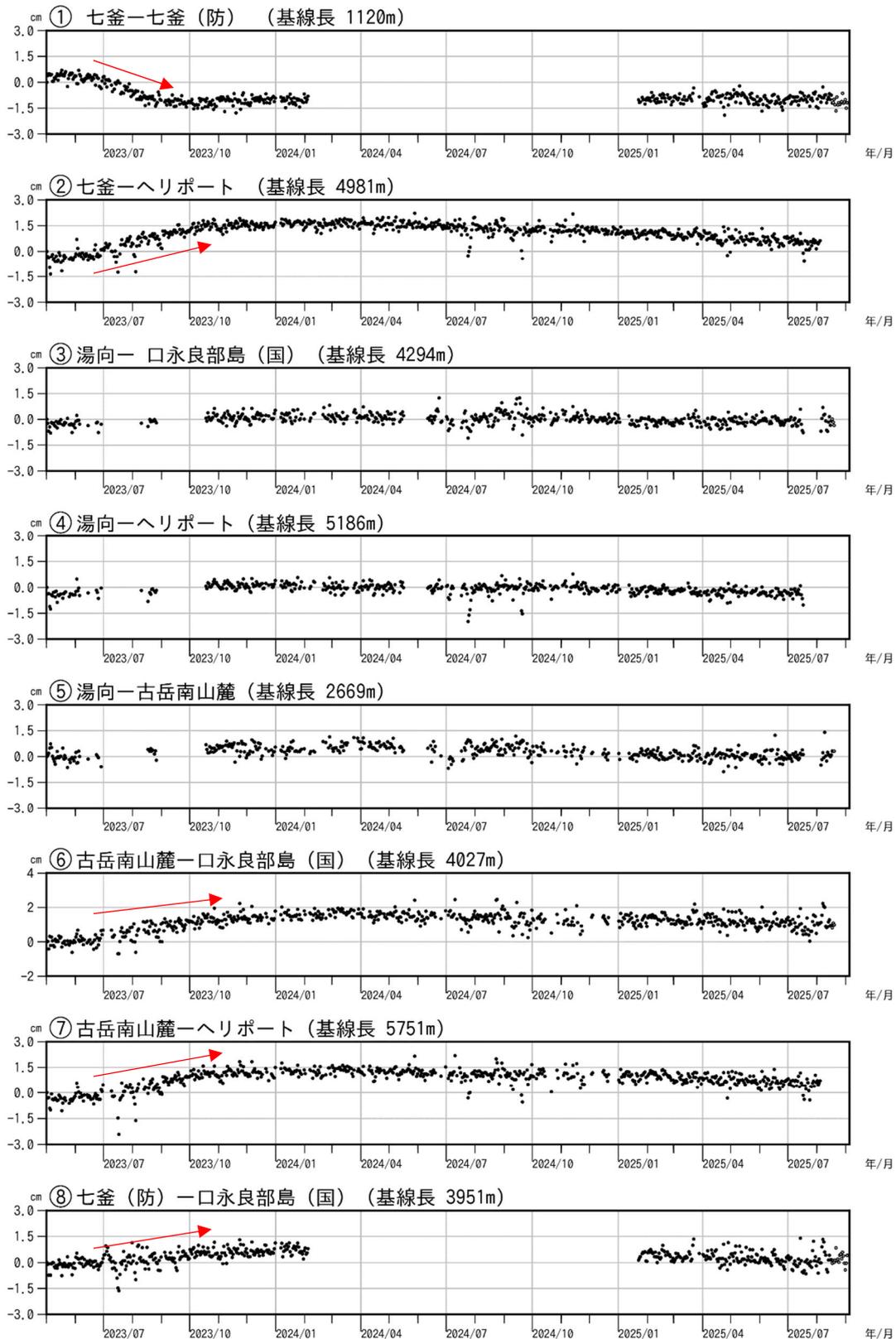


図5 口永良部島 GNSS 連続観測による基線長変化 (2023年5月~2025年9月4日)

GNSS 連続観測では、2023年6月下旬頃から同年10月頃にかけて古岳付近の膨張を示す変動(赤矢印)が観測されていますが、その後更なる膨張を示す変化は認められていません。

これらの基線は図6の①~⑧に対応しています。

基線の空白部分は欠測を示しています。

(国)：国土地理院、(防)：防災科学技術研究所

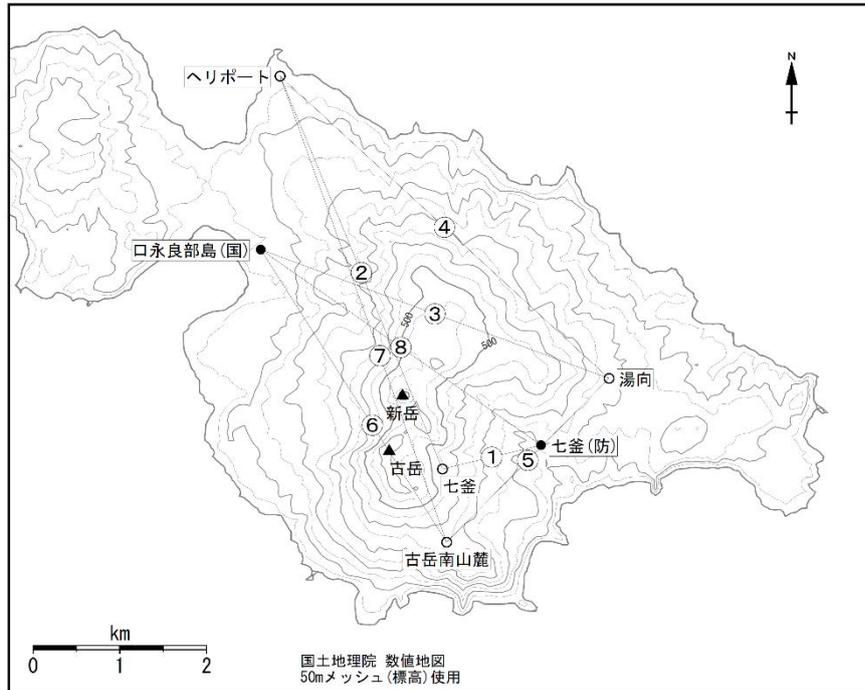


図6 口永良部島 GNSS 連続観測点と基線番号

小さな白丸 (○) は気象庁、小さな黒丸 (●) は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。

(国)：国土地理院、(防)：防災科学技術研究所

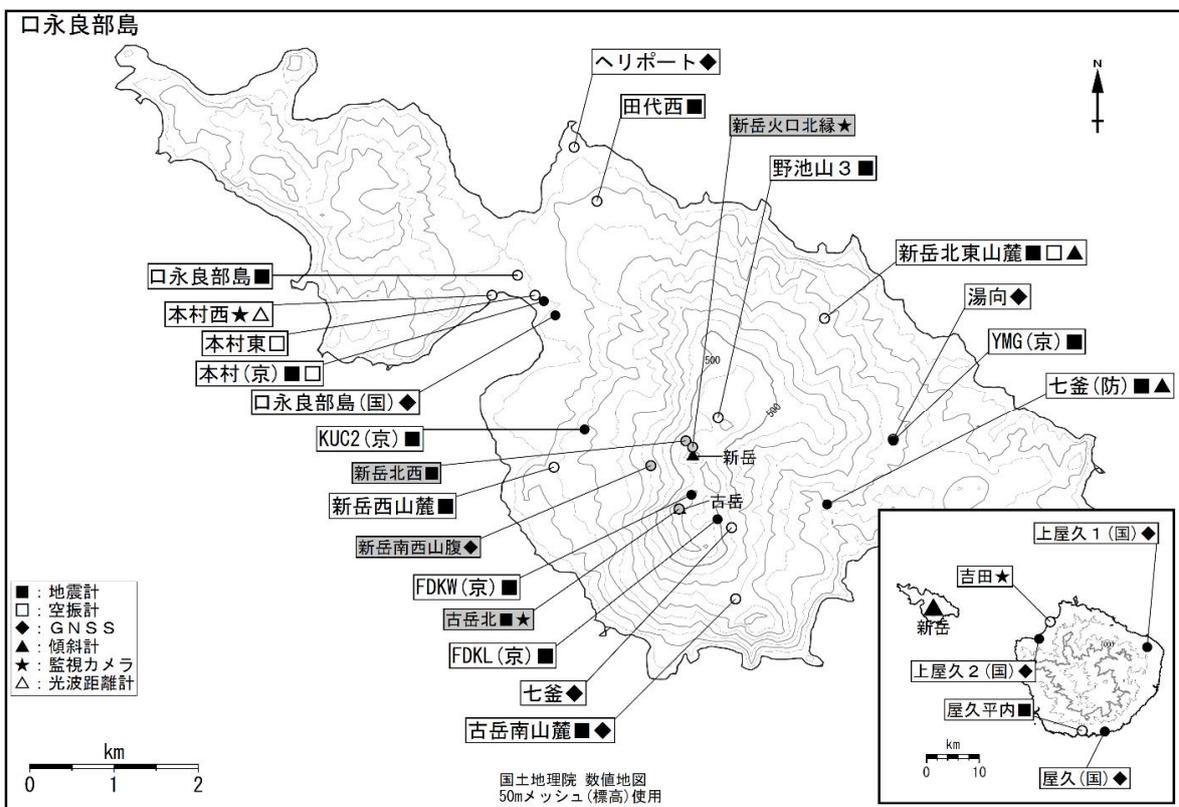


図7 口永良部島 観測点配置図

小さな白丸 (○) は気象庁、小さな黒丸 (●) は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。

(国)：国土地理院、(京)：京都大学、(防)：防災科学技術研究所

図中の灰色の観測点名は、噴火等により長期障害となっている観測点を示しています。